



## 漁具診断

No.4

# タチウオひきなわ釣り漁業における仕掛けの海中挙動の把握

(独) 水産総合研究センター開発調査センター 廣瀬 太郎

## 1. はじめに

大分県臼杵のタチウオひきなわ釣り漁業は、漁船漁業のビジネスモデル構築実証調査として取り上げられたことから、本ニュースレターにもたびたび登場してきました。今回は、調査の一環として臼杵で実施したタチウオひきなわ漁具挙動把握試験結果と、当地で使われているタチウオひきなわ仕掛けについて簡単に紹介したいと思います。なお、タチウオひきなわ漁具挙動把握は、過去に徳島県で行われたことはありましたが、大分県では初めての試みでした。

## 2. 臼杵のタチウオひきなわ仕掛けと曳航の流れ

図1に示した仕掛けは調査時に使用した

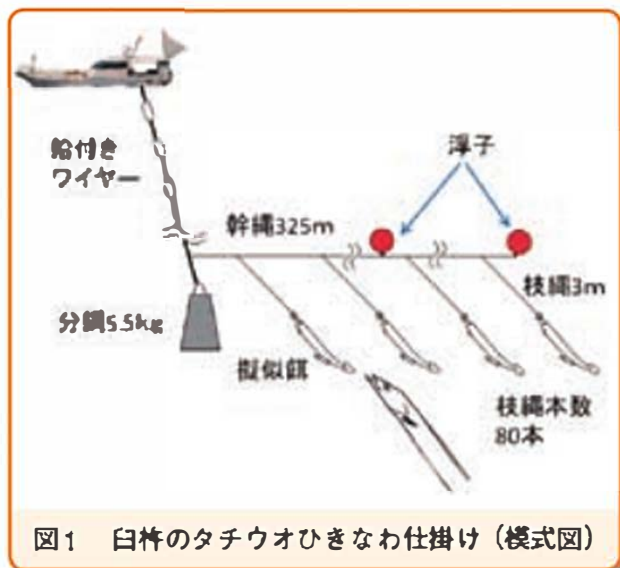


図1 臼杵のタチウオひきなわ仕掛け（模式図）

ものですが、基本的な仕様は臼杵で広く使われているものと同じです。調査時は、枝縄本数を80本、幹縄長325mとしましたが、枝縄本数80~100本、幹縄長300~400mが一般的です。幹縄末端に1個と幹縄途中に0~2個、直径5cm程度の浮子が付けられます。

操業では、仕掛けを海中に投入した後、鉛付きワイヤーに付けた分銅を海底まで沈めます。その後、タチウオの魚探反応の有る水深（無い場合は海底より数m上の水深）まで分銅を引き上げ、仕掛けの曳航を開始します。曳航速度は約2ノットで、曳航時間は、漁業者の好みや周囲の状況によって変わりますが、概ね15~30分程度です。

## 3. 漁具挙動把握試験

漁具挙動把握試験では、小型メモリー式



図2 小型メモリー式水深計  
(JFEアドバンテック製：MDS-Mk V/D)

水深計（JFE アドバンテック製：MDS-Mk V/D）（図2）を分銅直上、幹繩末端（尻浮き）および幹繩末端から35本目の枝繩部分（中浮き）の3か所に取り付けました。記録されるデータは水深と時刻で、データ取得は1秒間隔で行われるように設定しました。

ここでは仕掛けの挙動を分銅着底直後から示しました（図3）。曳航開始12分後では、分銅付近を除いて仕掛けは沈みきっていませんでした。曳航開始16分後になると、仕掛け前半部は最終到達水深近くまで沈みましたが、尻浮き付近の後半部は浮き上がった状態となっていました。その後も曳航を続けたところ、仕掛け後半部はさらに沈降しました。ワイヤー巻揚げが終わり、分銅が船上に到達した時点では、仕掛け後半部は依然として最終到達水深付近に留まっ

ていました。

#### 4. 最後に

この結果を漁業者に伝えたところ、多くの方は「分銅が海底に沈んですぐに仕掛けも沈んで一直線になる」と思われていたようで、「予想外の結果だ」との声があがりました。また、「この結果を基にして、操業時の仕掛けの動きを想像できるようになった」との声もいただきました。これまで、白杵のタチウオひきなわ漁業で使う仕掛けの水中での挙動を視覚的に示した例は無かっただけに、この結果が少しでも漁業者の参考になったのなら嬉しいかぎりです。

このように、釣り漁具の挙動（水深）把握は比較的簡単に行えますので、興味のある漁業者の方は開発調査センターまでご一報ください。

